質的研究と社会実装　第 2 号（2025 年）
立命館大学ものづくり質的研究センター
pp. 49–71

報 告

複線径路等至性アプローチを用いた「ナノエスノグラフィ」の提案

異なる文化を理解するための理論的基盤とモデル構築[1)]

発行：2025 年 3 月 31 日

上川 多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）
サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

連絡先：上川 多恵子（E-mail: tk0715sh@gmail.com）

Qualitative Inquiry and Social Implementation, No.2 (2025)
Center for MONODUKURI Qualitative Research, Ritsumeikan University
pp. 49–71

Report

A Proposal for 'Nano-ethnography' Using Trajectory Equifinality Approach

Theoretical Basis and Model Building for Understanding Different Cultures

Published: March 31, 2025

Taeko Kamikawa (Open Innovation & Collaboration Research Organization, Ritsumeikan University)
Tatsuya Sato (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Correspondence concerning this article should be sent to:
Taeko Kamikawa (E-mail: tk0715sh@gmail.com)

1)　本論文は第一著者が 2023 年に提出した博士論文の一部を修正加筆し，再構成したものである。

I　はじめに

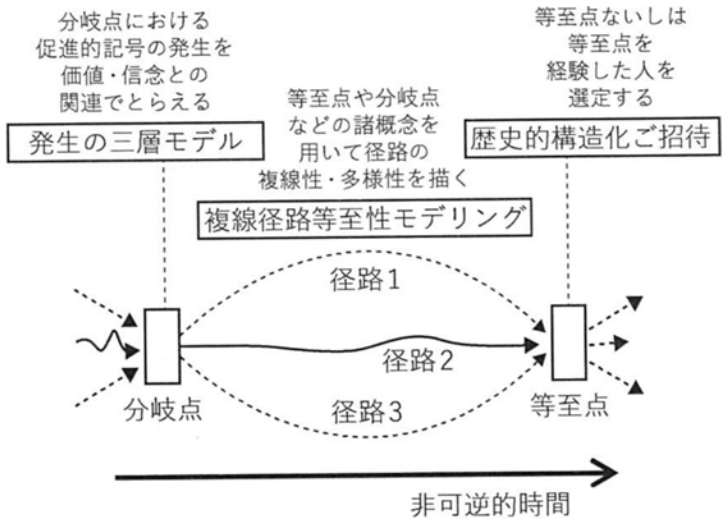
本論文の目的は，「異なる文化を理解するツール」として「複線径路等至性アプローチ：Trajectory Equifinality Approach（以下，TEA）」を活用し，TEA とエスノメソドロジー的視点を融合させた「ナノエスノグラフィ」の提案を行うことである。その上で，本論文では筆者が作成した分析手法としてのモデルとその理論的背景について報告する。

なお，「異なる文化を理解する」ということは、異なる国と国を比較してその文化の違いの理解を目指すということではなく，自分以外の人と接するという前提のもとで「他者を理解し，他者を通じて自己を理解すること」を目指すことであると考えたい。また，「異なる文化を理解する」ということは，「人々のこれまで生きてきた人生に目を向け，ある状況下において『どのように振る舞うのがふさわしいのか』という，物事に対する人々の価値観・信念を理解し合うことである」とする。

TEA は三つの方法論から構成される。一つ目は，研究協力者をご招待する方法である「歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting：以下，HSI）」，二つ目は，非可逆的時間に基づき人生の径路を捉え可視化する方法としての「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：以下，TEM）」，三つ目は，価値の変容や維持を捉えることができる「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：以下，TLMG）」である。安田（2023）によると，図 1 に示されるように，TLMG は TEM の基本概念の 1 つである分岐点（Bifurcation Point：以下，BFP）における促進的記号の発生を価値・信念との関連でとらえるものであり，HSI は同じく等至点（Equifinality Point：以下，EFP）ないしは EFP を経験した人を選定する概念として整理されている。

筆者が TEA を異なる文化を理解するツールとして用いることを検討したいと考える主な理由は二つある。一つ目は，TEA は「文化が人に属する（Valsiner 2001）」という文化心理学の観点から考えられた研究手法であるという点，二つ目は，TEA は多様な文化を「複線性」として捉えることができる研究手法であるという点である。木戸（2023a）は文化心理学の特徴として，

図 1　TEM の最小単位からみた、基本概念と TEA との関連（安田 2023）



「第一に比較しなくても文化は理解可能だと考える点，第二に文化とともに変容していく人を捉える点にある（p. 10）」とし，サトウ（2019a）は「人間が生まれてからその環境と関わりながら，また，文化を移動したときに新しい文化に適応しながら，それぞれが人間らしくなっていくその普遍的なメカニズムを知ろうとする心理学（p. 15）」が文化心理学であると述べている。

このようなことから，本論文では「文化が人に属する」という文化心理学の観点と文化を多様性から複線性として捉えることの意義を論じる。その上で異なる人々や国々の存在を比較するのではなく，個人のこれまで生きてきた複線的な人生径路に目を向けながら「個人の中に属する文化」を理解していくことを通じて「異なる文化を理解する実践」へとつなげることを目指したい。

II　研究背景

1　文化心理学から見る異文化理解：「記号」と「複線性」の視点

異文化コミュニケーション分野に関わる研究では，19 世紀イギリスの文化人類学者であるエドワード・タイラー（Edward Tylor）の「文化」の定義が扱われることが多い（加賀美 2019；古家 2017）。竹沢（2018）によると，タイラーは「文化」を「知識，信仰，芸術，倫理，法，慣習その他，社会の一員としての人間によって獲得される能力と習慣の複雑な総体（p. 5）」であると定義した。文化は、複数の異なる国の文化として研究される（例えば，日本文化とアメリカ文化を比較するなど）こともあるが，同じ国の中の身近なところでも異文化に触れる機会は多い。例えば，引っ越し，入学，就職，結婚，転職なども異文化を体験する機会であり，自分以外の人と接することは異文化と接することである（山本 1999）。文化人類学は，異なる社会文化的背景を持つ人々がどのような体験と意味を持って生きているのかということに対し，己の先入観を排してその実像に迫ろうとする学問であり，広くは他者を理解するための学問，他者の理解を通して自己を知る学問（辻内 2018；関根 2018）である。そして，文化に優劣はなく文化の多様性・異質性を認知し容認することを前提に発展してきている。

また，「文化」は，生活様式，習慣などにあたる「目に見える文化」と，目に見える文化を支える価値観や思考法などにあたる「目に見えない文化」に分けられ（山本 1999），特に価値観や思考法にあたる「目に見えない文化」は目には見えないがゆえに異文化理解において難しく考えられることが多い。塙（2019）は，自分の経験や社会的な慣習に基づいて内面化された「ふさわしさ」という表現で以下のように言及している。「日常生活のあらゆる場面における適切な対処法が書かれたマニュアルなど存在するわけがないので、そこで参照されるのは、自分の経験や社会的な慣習にもとづいて内面化された『ふさわしさ』である。そしてこの『ふさわしさ』こそ、私たちの意識を統制し、行動を規定し、ときにある種の暴力を振りかざす、みえない力となっているのだ（p. 26）」。このような「ふさわしさ」とは，ある状況下において，「どのように振る舞うのがふさわしいのか」という，物事に対する人々の価値観と深く結びついているものであると考えられる。

2　「文化が人に属する」という文化心理学の観点

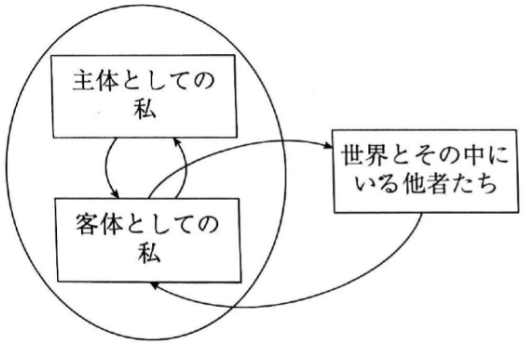
TEA はヴァルシナーの記号論的文化心理学に基づいた創案によって開発されたもので，「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ（サトウ 2015a，

p. 4)」である。そして，「生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセスを描く，心理学的試みのこと（サトウ 2015b, p. 4)」を指す。Valsiner (2014=2024) は文化心理学での文化について，①再構成されるもの（方向性のあるコミュニケーション行為の過程を経て，世代間，同年代の人びとの集団間で新たな形で再構成されるもの)，②内化／外化されるもの（記号によって伝達されるメッセージを能動的に分解し，新たな心理内的パターンに再構成し，それを他者がアクセス可能な範囲に持ち込むこと)，③コーディネートされるもの（異なるエージェント，ヒト，社会制度が指示されているが境界域的に不確定なままである方法で，互いの人生世界の経験を調整している）という 3 つの特徴があると指摘する。その上で，文化とは「人間発達の主体と客体との間のプロセス関係であり，文化は人の中にあるのであって，その逆ではない（Valsiner 2014=2024, pp. 34–35)」と論じている。比較文化心理学の立場では文化が実体化されており，「人が文化に属している」と考える。しかし，文化心理学の立場では「文化が人に属している」と考える。そして，文化心理学では「文化は常に人間に纏うことで文化たりうるのだ（サトウ 2006, p. 68)」と考えられている。

「文化が人に属する」という点において，サトウは「文化が人に属する」という意味を「人が文化を抱えている」と考えれば，「人が複数の文化をもつ」あるいは「人が複数の文化を抱える」といういい方が可能になる（サトウ 2017, p. 215）と指摘する。すなわち，複数文化が記号を介して人に属することになり，私たちの日常生活は多重記号状況にあることになる。そして，TEA においてそのような多重記号状況の中で促進的記号（詳しくは後述）が働くのが分岐点（BFP）であり，必須通過点（OPP：Obligatory Passage Point）と分岐点（BFP）の分析こそが，文化的存在としての人について理解することにつながるとされている（サトウ 2017, p. 219)。

木戸 (2023a) は Valsiner (2014=2024) の “Culture as process of relating” をもとに「関係性のプロセスとしての文化」を提示している。記号は常に同じではなく個人の認識や置かれた文脈によって常にその意味を変容させており，ヴァルシナーは図 2 のように，文化を「自己（主体としての私：I ＜＞客体としての私：ME)」と世界やそこにいる人との関係性の過程として扱っている（Valsiner 2014=2024; 木戸 2023a)。ここでの「主体としての私」と「客体としての私」は自己の中で関係性を持つ内的ループであり，「客体としての私」は「世界とその中にいる他者」を記号の調整による「文化」によって繋ぐものとなる。

図 2　関係性のプロセスとしての文化
（木戸 2023a; Valsiner 2014=2024）



また，『質的心理学辞典』の「文化心理学」という項目では，異なる文化をみるアプローチとして，「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物（道具）を文化ととらえる（上村 2018, p. 277)」ことが示されている。このような，道具や社会組織のみならず，人間の生活の中にある言葉や記号，制度，概念などの人工物と相互行為との繰り返しにより，人間がどのように心的機能を構成し，再構成していくのかという過程を記述していくアプローチ（上村 2018）は，ヴァルシナーが取り入れたヴィゴーツキーの記号の

心理学に由来した文化心理学（宮下・安田 2024）のアプローチであり，上述した「文化が人に属する」という考え方と関わりは深いと考えられる。木戸（2023a）によると，文化心理学を理解するのに基礎となるのはヴィゴーツキーの「記号の心理学」であり，それは「主体，記号，対象」から成るヴィゴーツキー・トライアングルで説明され，このヴィゴーツキー・トライアングルでは言葉や教育，芸術などを記号として考えて理論を発展させている。このようなヴィゴーツキー・トライアングルは媒介を通じて他者へ働きかける行動と認識に関わる基本とされる（木戸 2023a）。そして，文化心理学における主な焦点は，人間の経験の個人的な（主観的な）領域と社会的な（集合的な）領域の調整された（同型的でなく）発達であり，社会世界の能動的な構築者である精神，そしてそれを通じた自分自身の精神にある（Valsiner 2014=2024, p. 34）。

Valsiner（2007=2013）は，文化心理学の立場から「文化，というと高尚なもの，伝統的なもの，という感じがするが，文化心理学にそうしたこだわりはない。むしろ，日常生活におけるその日常らしさを成り立たせているのが記号であり，その総体が文化だと考える。その意味で文化とは記号の配列の総体だ，と言えるかもしれない（p. iv）」と指摘している。ヴァルシナーの視点から見れば，人間には誕生の瞬間から様々な支援が設定されており，それら全てが文化であると考えるのがヴァルシナーの基本的立場である（サトウ 2006）といえる。更に言えば，ヴァルシナーの述べる文化とは，個人が世界と関わる様々に異なるプロセスを通して体現されるものであり，文化は「内化と外化のプロセス」という「個人と社会的世界の間の相互構成」と見なしている。そのため，ヴァルシナーの主張する文化は「実在するものというより，むしろこのような仮定されたプロセスのことである（Valsiner 2007=2013, p. 5）」と位置づけられている。さらに，文化について Valsiner（2007=2013）は，「文化は，組織化された心的機能のシステムの一部である記号（サイン）的媒介として見ることができる。この機能は，個人–内のものでありうる（すなわち，世界を経験することに関わりながら，個人の心理–内プロセスで機能する。特に，感じたり思考したり記憶したり忘却したり計画したりなど。）（p. 13）」と説明している。

人びとが生きている世界には人の行為を導くための記号がいくつも配置されており，人びとは記号を選び取りながら生活している。そして，記号として文化を読み解くことで，新しいものの見方が可能になるという理論的見解が文化心理学の中心的な考え方となる（木戸 2023a）。また，人間における文化のメカニズムの基本は「記号とその作用にある（サトウ 2019a，p. 16）」。このように，「記号」を中心概念とし，人間の未来志向的かつ動態的な発達を理解することを目的とする文化心理学（サトウ 2024）を「記号論的文化心理学」と呼ぶ。

以上のことから，文化は個人に属しているものであり，記号によって調整された文化を捉えようとする記号論的文化心理学の観点は，異なる他者（国や人々）と比較することをせずに，記号を媒介とし，個人がどのような文化を築いているのかということを考えることができる。

3　文化の多様性から複線性へ

TEA（複線径路等至性アプローチ）には「複線径路」という表現が用いられており，人生径路の（多様性だけではなく）文化を複線性として捉えることの重要性が指摘されている（サトウ 2023a）。

異文化理解においては「文化」の多様性について述べられることが多いが，アメリカの人類学者であるフランツ・ボアズ（Franz Boas）は，文化として見られる人間の行動には個人の心理や独自の歴史的契機にもとづく変数があまりにも

多く，文化様式に見られる変異の大きさ，複数性，多様性といった点があることを強調している（Garbarino 1977=1987）。ボアズは「各々の文化は，個々の歴史上の出来事や状況によってつくり出された，独特の産物である。個々の文化は，歴史の偶然によってつくられており，あまりにも多くの順列や組み合わせがあって，その因果関係や文化的差異について一般化することは不可能だ（Garbarino 1977=1987，p. 118）」という歴史観を持っていた。このような歴史観から，ボアズはあらゆる価値は相対的であって，そこに普遍的な標準はないという考え方を持ち，ある社会は他の社会に比べて進んでいるかいないかなどという判断は誰にもできることではなく，そのような比較は一つの文化の中でこそ意味があるが，文化の境界を越えてはいけないものであるという「文化相対主義」の概念を提唱した（Garbarino 1977=1987）。つまり，「文化相対主義」は「世界中の文化はそれぞれに存在価値が内在しているために文化間の差異に優劣はつけられないとする考え方である（石井・久米 2013，p. 32）」とされており，このようなボアズが提唱した「文化相対主義」は他者理解にとって必須の要件であるとされている（山本 1999）。

しかし，異なる文化の多様性を強調する立場は文化の「差異」を強調し，結果的にその差異を固定的なものとして捉えがちであり，文化の違いを超えた相互交流の土台を見出すことが困難になる可能性があることが指摘されている（前川 2018）。例えば，日本では「多文化共生」という言葉が多様性を認める良いイメージを持った言葉として用いられているが，「共生」という言葉が持つ「日本人には受け入れやすい」，「心地いい調和的な響き」が多文化社会における不平等や差別といった側面を覆い隠してしまうことが懸念されている（岩渕 2010；相原 2019）。したがって，文化について考える際は，文化の多様性を強調するあまりに，結果的に互いの文化が異なっていることを過度に強調したり，文化の問題が現実には社会間相互の政治経済的な関係性の歴史とつながっていることを見過ごしたりする危うさがあること（前川 2018）に留意しなければならない。

ここで「文化相対主義」だけでなく，「文化本質主義」という考え方について触れておきたい。文化本質主義は「国家単位でアメリカ文化や日本文化とひとくくりにして，文化比較研究を試みる傾向や，文化を静態的もしくは普遍的なものとみなすこと（石井 2013，p. 241）」や，「文化の特徴を不可変的なものとして捉え，その文化的特徴によって人々の行動や認知が一様に規定されると考えること（古家 2017，pp. 16–17）」のように説明される。つまり，文化の多様性を主張する「文化相対主義」に対して，「文化本質主義」とは「特定の文化を静態的なもしくは普遍的なものであるとみなし，文化の特徴は不可変的なものであり，文化と文化の間には何らかの明確な境界があると考えること」であると言える。このような「文化本質主義」は異文化間でのコミュニケーションにおいて否定的な側面が強調されることが多い。しかし，古家（2017）は，文化本質主義を肯定か否定という二項対立的に捉えるのではなく，それがいかにアンビバレント（両義的）であるかその両面性を研究できる分野として，弁証法的に存在する可能性があると指摘している。

上述したように，サトウ（2023c）は文化を「複線性で捉えること」の必要性を指摘し，さらには多様性という概念に時間という概念を付け加えることが重要であり，たとえ個々人の径路は異なっていたとしてもそれらは同じ目的や理念の到達を目指しているのだと考えることが包括的な社会を作る切り札になるのではないかと主張している。また，異なる文化は価値が違っているのではなく，記号のレベルが異なっているということを指摘し，自分と同じ価値観をもっているが文脈的枠づけと促進的記号が異なっていると考えることができれば，無用な文化間の

軋轢を少なくすることにつながるのではないか（サトウ 2019b）と論じている。

よって，これまでの議論から以下の 3 点が重要であると考える。第一に，文化は変容するという特性を持つことを認識する必要がある。他者（対象）への働きかけは自身が生きる文脈を形成し社会的な関係性を変容させていく（木戸 2023a）。第二に，文化の多様性を単なる差異として固定化せず，サトウ（2023c）が主張するように，時間的な変化を伴い，かつ，等至性を持つという意味で複線性という観点から捉え直す必要がある。これは，異なる文化的背景を持つ人々が，異なる径路を通じながらも共通の目的や理念に到達しうることを示唆している。第三に，複数の文化を互いに排他的に捉えるのではなく，サトウ（2019b）が指摘するように，文化間の違いを記号レベルの違いとして理解することで，より深い相互理解に基づく異文化間の対話が可能となるのではないかという点である。文化心理学に対する展望の中で田島（2000）は，文化心理学が総合科学的領域であることを前提に，複数の異なる視点や方法論との対話，つまり，各個別領域の研究者にとって異文化接触的な対話を経験することが，研究対象領域についてさらに深い理解を促すことになると期待している。研究においても複線的なものの見方が必要となる所以である。

このような理解に基づき，本論文では異なる文化を理解するツールとして TEA を活用し，記号論的文化心理学の立場から「文化が人に属する」ことに注目する「ナノエスノグラフィ」の提案を行いたい。

IV　ナノエスノグラフィの概要と特徴

TEA とエスノメソドロジー的視点を融合させた「ナノエスノグラフィ」を提案するとともに，その概要と特徴を論じる。ヴァルシナーはヴィゴーツキーが分析単位に「最小のゲシュタルト」を置いたのにならって，ナノサイコロジー（nano psychology）の可能性を述べている。ナノサイコロジーとは，ある事例から得られる知識を最も広く応用できるよう，可能な限り小さな独自の事例を研究する学問（筆者訳；Valsiner 2018）であると論じており，本論文で提案する「ナノエスノグラフィ」はこのような可能な限り小さな独自の事例を研究する学問の一つとして位置づけたい。また，Valsiner（2015）は，人びとが最初は理解できなかった状況が，ある瞬間に「腑に落ちる」ような体験を日常的に行っており[2)]，そのような人間の感情がどのように形作られ，変化し，最終的に人間の行動を導く意味のシステムになっていくのかを研究する方法を確立することの必要性を指摘している。そこで，本論文では「ナノエスノグラフィ」の分析方法として，日常生活の中にある自明的な行為に着目し，TEM における BFP（分岐点）に焦点を当てて「文化が人に属する」というときの「文化」（記号による調整）をエスノメソドロジー的視点によって微細に追及し TEA で分析することを提案する。

質的研究法について構造と過程という二次元で整理を試みた『質的研究法マッピング』において，TEA は「過程」と「実存性」を重視するものとされ「モデル構成」というラベルで整理された象限に位置づけられている。一方，エスノメソドロジーは『質的研究法マッピング』において「過程」と「理念性」を重視するものとされ「記述の意味づけ」というラベルで整理されたものの中に位置づけられている。両者は過程を扱うという点で一致するが，「実存性」（実際に存在することを理解するのか）か「理念性」（現象の背後にある本質的なことを理解するのか）という「学問の姿勢」では一致しない（サト

2）原文は nano psychology which is the investigation of the minimum possible unique instance for the maximum generalizability of the knowledge that is available in the instance.

ウ 2019c)。ここで，一致しないことを対立として見るのではなく相補的な関係と捉える観点からみれば，TEA とエスノメソドロジー的視点を融合させた「ナノエスノグラフィ」は，ある活動について，エスノメソドロジーという記述の意味づけを用いながら，TEA を用いて分析し，個人の心理内的な記号のプロセスに迫りその結果をモデル構成するものとして捉えることができる。つまり，TEA とエスノメソドロジー的視点の融合とは，エスノメソドロジーの視点を参考としながら日常生活における微細な文化を捉え，その結果を TEA によってモデル構成していくことなのである。

エスノメソドロジーは「エスノ（人びとの）」の「メソッド（方法）」に学ぶ「ロジー（研究法）」と呼ばれ，二つの特徴を持っている。一つ目は，部分と全体が相互に支え合う「過程」に注目しているということであり，二つ目は，探求の対象を研究者が解くべき問題から当事者が解きつつある問題に変更したことである（樫田・岡田 2019)。串田・好井（2010）はエスノメソドロジーについて「どこか遠いところにある社会，理論的に抽象された社会を考え，そこに向かうのではない。つねに私たちが『いま、ここ』で生きて在り，他者とともにつくりあげている『社会』を志向する（p. 11)」と指摘している。また，樫田・岡田（2019）は，エスノメソドロジーは「研究者が一方的に社会理論を作るための研究法ではなく，人びとが実際に解きうる問題を解くことに寄り添う研究法（p. 181)」としての可能性があると指摘している。「エスノメソドロジー研究は自明な日常世界の解剖（南 1996)」であり，エスノメソドロジーは人びとの日常的実践行為のなかに，自明的な世界を構成する「方法」を読み取ろうとする方法である（南 1996)。本論文でのエスノメソドロジー的視点とは，このような「他者とともにつくりあげている社会を志向し，人びとが実際に解きうる問題を解くことに寄り添う研究法」であるとともに，「自明な日常世界の解剖」という観点を注視したい。

また，Francis & Hester（2004=2014）によると，エスノメソドロジー研究は「自己省察」,「記録されたトークや行為の分析」,「浸されること（イマージョン）を通じての習得」という三つの様式（モード）に分けられており，様々な形で応用できるとされている。これら三つの様式（モード）は「研究対象となる活動へとあらかじめ浸されることが分析の前提になるという共通の想定の上に成り立っている（Francis & Hester 2004=2014, p. 47)」ことに着目し，研究方法を検討していく必要がある。

最後に，TEA とエスノメソドロジー的視点を融合させた研究方法の研究範囲単位は，「個人における情緒的なものを含んだ行為」について考えるものであり，「場や場面における人々の心理内的プロセス」であることを明示したい。カール・ビューラー（Karl Bühler）が，記号はすべて場依存的（fieldable）であると指摘しているように，置かれた状況と無関係に記号が存在できるわけではない（サトウ 2019a)。そのため詳しくは後述するが，マイクロエスノグラフィにおける「微細（マイクロ）なユニット」が，「人＋状況」という「場や場面（setting)」を単位として扱う（木下 2019）ように，ナノエスノグラフィにおいても「場や場面（setting)」が重要な単位となる。本論文で示す「ナノエスノグラフィ」の概要は図 3 のとおりである。

V　分析手法モデルの提案

1　モデルの概要と特徴

本論文が提案するナノエスノグラフィは，TEA にエスノメソドロジー的視点を取り入れているということであり，エスノメソドロジーの

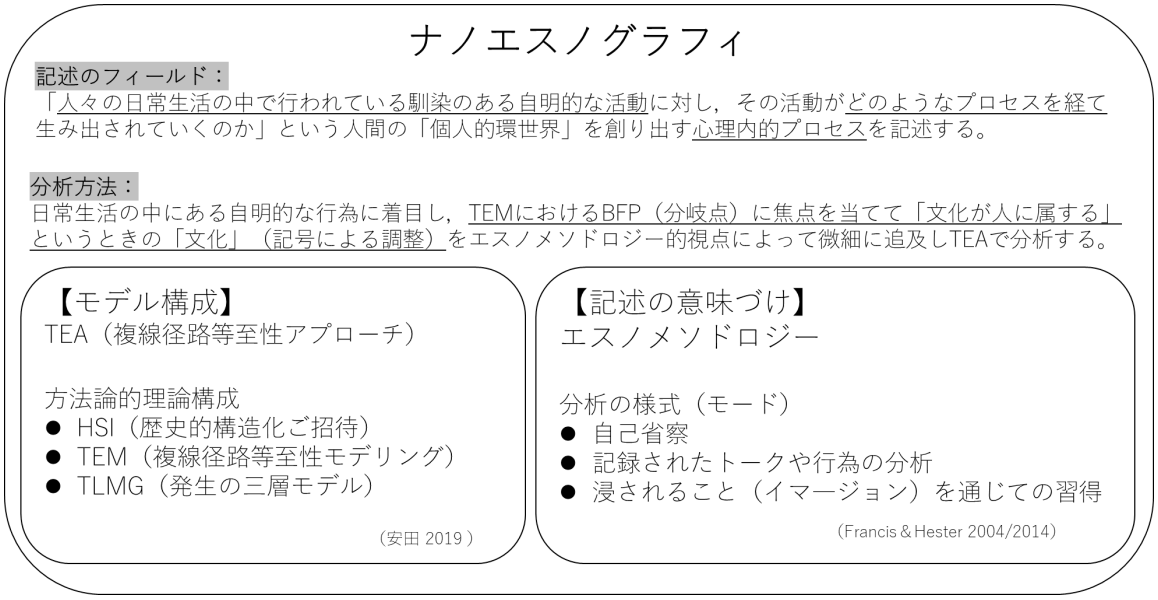
方法論として提唱しているものではないことを補足しておきたい。樫田・岡田（2019）は「エスノメソドロジーは，文脈の多様性に繊細であろうとし，『理論構築』や『モデル構成』とは対称的な議論の方向性を持ちながら，概念による媒介を否定する『実存性』に居直ることもしない営みなのである（p. 177）」と論じているように，本論文で提示したナノエスノグラフィとエスノメソドロジーは言うまでもなく異なるものであり，ナノエスノグラフィはエスノメソドロジーの視点を参考としながら，TEA によって分析の結果をモデル構成していくものであると考える。

筆者らがナノエスノグラフィと名づけたのは，文化を記述する方法の代表としての「エスノグラフィ」を重要視しているからである。エスノグラフィは「人びとの共有された振る舞い方や考え方のパターンとしての文化を現地の人びとの視点から描くための方法（柴山 2018a，p. 28）」であり，心理学においては「文化的実践と心理過程との相互構成過程を把握する方法（柴山 2018a，p. 28）」として導入されている。そして，「多くのコミュニティで構成され，国レベルの諸機関をもつ複雑な社会の文化」を記述するマクロエスノグラフィと，「単一の社会的状況」について研究するマイクロエスノグラフィの二つに分けられる（Spradley 1980=2010）。

マイクロエスノグラフィは，「行為・発話・相互作用・意味に着目して人びとの日常営為を質的に読み解こうとする心理学・教育学研究とも親和性が高く，日本の質的研究における重要な手法の一つ（柴山 2018b，p. 294）」であり，スプラッドリーは「場所」「行為者」「活動」の三要素からなる単一の社会的状況は，マイクロな社会的状況に投影された社会の文化的意味やその変容を解明する有効な単位になると考え，単一の社会的状況について研究する際はマイクロエスノグラフィを推奨した（柴山 2019）。このようなマイクロエスノグラフィは「各人が意味世界を構築する具体的プロセスそのものの理解とそこにマクロな諸力がどう投影しているかを読み解く（箕浦 1999，p. 20）」ことができる。

「マイクロ」に含まれる一つ目の意味は「場や場面（setting）」であり，もう二つ目の意味は「微発生」である。「微発生」は一般的に「微

図 3　ナノエスノグラフィの概要



視発生（micro-genesis）」と呼ばれ，「微視発生（micro-genesis）」は Aktualgenese（独）の英語訳として知られている。しかし，本論文では原語である Aktualgenese（独）の〈実〉＝〈現〉の意味（実際に現れるという意味で発生を示していること）を捉えることが重要であると考え，micro という程度を表す接頭辞を「微視」ではなく「微」と訳すこととする（サトウ 2024）。よって，本論文では micro-genesis のことを「微発生」と表記する。

「場や場面（setting）」は「人＋状況（南 1997）」というまとまり（木下 2019）を指している。この「人＋状況」というマイクロな単位は，社会制度が実際に使用される学校，病院，鑑別所といった場で，参与観察によるエスノメソドロジーが行われることが多いところから論じられたもの（南 1997）であり，「人＋状況」という「場や場面（setting）」を扱うマイクロエスノグラフィは，エスノメソドロジーとの親和性が高い。南（1996）は，認識の発達をエスノメソドロジーの視点から微視的に分析するための理論的・方法論的な橋渡しとして「微発生」の概念を導入するとき，ある概念や手続きがくみ上げられていくプロセスをミクロな時間レベルの意味生成，意味の現実発生と捉えることができるとしている。このような「微発生」の概念はマイクロエスノグラフィの「マイクロ」の二つ目の意味にも用いられているが，TEA においても重要な概念の一つである。Valsiner（2007=2013）は「人々のその時々の経験は基本的に「微発生」的であり，非可逆的時間の無限の連続の中で，常に新しい次の瞬間に直面しながら生じている（p. 369）」と論じており，人々の経験が「微発生」的なものであることを強調している。

このようなことを踏まえ，以下ではナノエスノグラフィの分析手法としてのモデルと称する TLMG とイマジネーション理論を統合した分析手法を提示したい（図 4）。本論文で提示するモデルは，①ヴァルシナーの「相互依存的な関係プロセスとしての内化と外化」，② TEA における TLMG（発生の三層モデル），③ズィットゥンのイマジネーションループモデルを用いて作成した。ここでは図 4 のモデルの理論的背景について述べる。

2　モデルの理論的背景

(1) TEA における TLMG（発生の三層モデル）

図 4 の左側に位置する三角形は，「発生の三層モデル（TLMG）」を採用した（図 5）。TLMG はヴァルシナーがつくった「心理の内界に関する層モデル（laminal model of the intra-psychological world；サトウ 2022，p. 30–31）」に依拠しており（図 6），「個人の内部に焦点をあてた際に，どのように内化と外化が進むのかというプロセスを説明するモデル図（宮下 2023，p. 56）」である。このような TLMG は「行為レベル（第 1 層）」「記号レベル（第 2 層）」「価値観・信念レベル（第 3 層）」の三つの層により人間の内的変容過程を理解する理論である（安田 2019，2023）とされている。

TLMG は，主に TEM における「分岐点（BFP）」で生じる個人の自己変容や行動変容を分析することができる。BFP とは EFP に至るまでの複数の径路の分かれ道であり，突然新しい選択肢が現れたりするポイントである（安田 2015）が，TLMG の目的は「BFP で生じる径路の選択プロセスにおいて，三層間の動的な記号の働きをとらえることで，個人の自己変容や行動変容を記述することにある（サトウ 2022，p. 28）」。また，TLMG は「文化的記号を取り入れて変容していくシステムとしての人間の内的変容過程を理解する理論体系（安田 2017，p. 18）」であり，「記号」が重要な概念の一つとなっている。

TEA における記号とは，開放システムとして

図 4　ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル（筆者作成）

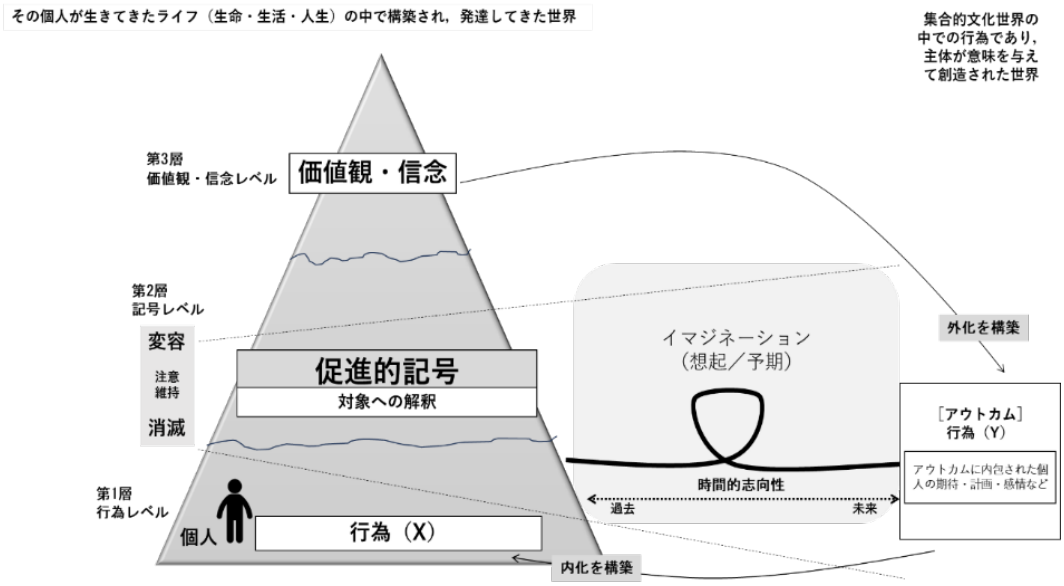
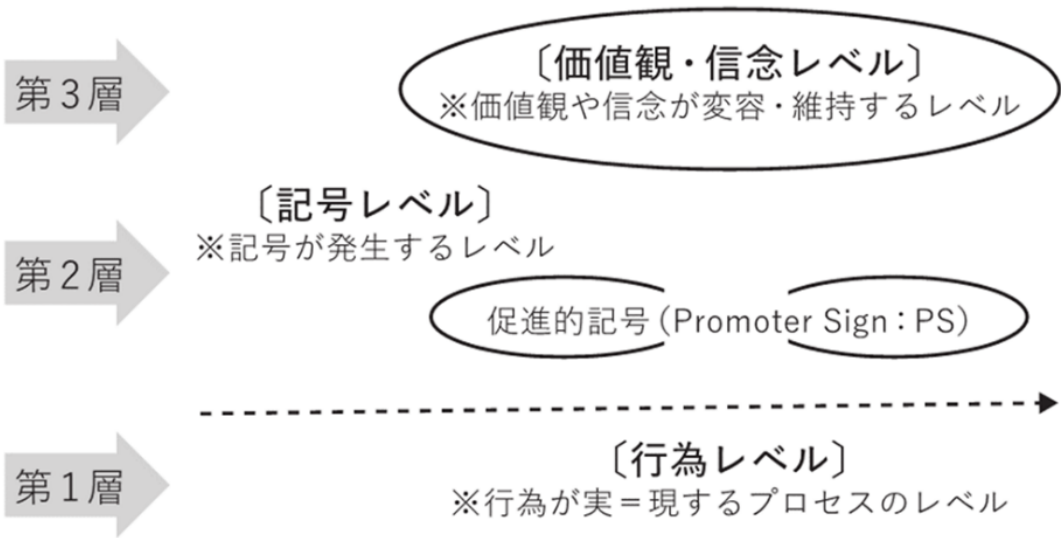


図 5　発生の三層モデル（安田 2023，p. 97）



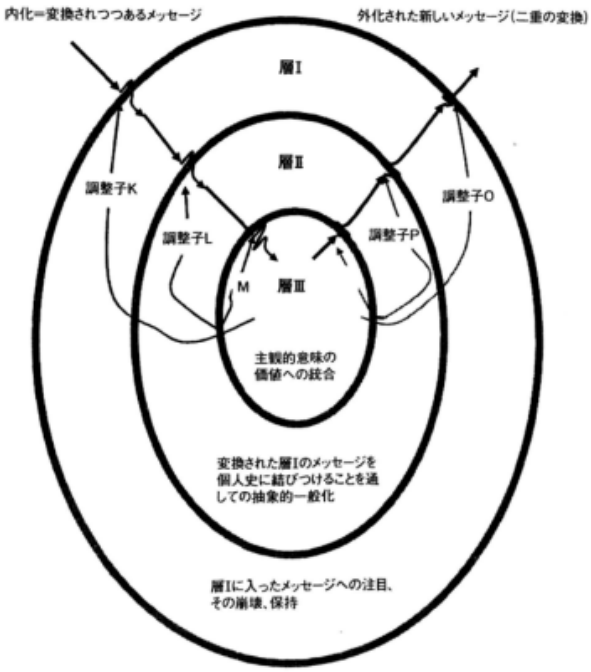
の人が外界とのコミュニケーションを行う際の媒介になるものであり，歴史的・文化的・社会的な影響を分析するための概念（宮下・上川・サトウ 2022a）として重要なものである。そして記号は，TLMG においては三つの層のうちの一つである「記号レベル（第 2 層）」で分析される。サトウ（2009a）によると，ヴァルシナーは時間の流れの中で人を何か新しいことへ導く作用が記号にはあることを重視し，記号を「未来と向き合う何らかの機能をもち，過去の状態から何か新しいことへと導く何かである（p. 36）」と定義した。このような「新しいことへ導く記号の働き」を重視して作りだした記号概念は「促進的記号」と呼ばれている（サトウ 2019a）。つまり，「分岐点（BFP）における促進的記号の発生を価値・信念との関連でとらえる（安田 2023）」ように，あらゆる記号は促進的記号として機能する可能性があること，そして，人間にとっての未来を志向する時間を拡張し，さまざまな未来の可能性を構築するガイドとして記号が作用する可能性がある（宮下・上川・サトウ 2022a）ことが，TLMG における「記号レベル（第 2 層）」を分析する上で重要となる。

また，「記号のレベル（第 2 層）」は TLMG における「行為のレベル（第 1 層）」と「価値観・信念のレベル（第 3 層）」の間に位置づけられている。サトウ（2022）は，ある状況で自分とは異なるやり方をする人と出会ったとき，私たちはその人のことを自分とは価値観の違う人だとラベルづけしがちであるが，これは「行為が違う人は価値観が異なる」という行為–価値直結の二層モデル（行為が価値を直接反映するという仮説）が背景にあるからであると指摘する。「価値–行為」直結説は，相手の行為に違和感を感じるのみならず，その行為を相手の価値によるものだと断定してしまい，それが相手の人格的否定に結びつき，結果としてさまざまな対立や分断を増幅させる可能性がある（サトウ 2023b）。しかし，TLMG の理論的背景にある「行為」と「価値観・信念」の間にはその繋がりを媒介する「記号」が存在しているという考え方が成立しているため，「価値–記号–行為」説となることで人間の行為からその価値観を直接的に類推してしまうということを回避することが可能になるのである。

TLMG は，TEM において BFP（分岐点）として捉えられた経験について，「開放系（オープンシステム）としての生体が情報の内化と外化を行いながら変容していくさまをとらえるためのモデル（サトウ 2022，p. 29）」である。サトウ（2022）によると，ヴァルシナーは 1997 年に「人間の心はどのようにして社会的であると同時に個人的であることができるのか？」ということに関心を持ち，ボールドウィン（Baldwin）の社会発生的理論を手がかりにしながら，レヴィン（Lewin, K）の同心円モデルを参考に情報の内化と外化のモデルをつくったと説明されている。図 6 は Valsiner（2007=2013）に掲載されている「心理の内界に関する層モデル（laminal model of the intra-psychological world）」である。このモデルは TLMG の基礎となるモデルである。

図 6 で「層Ⅰ」「層Ⅱ」「層Ⅲ」と示されているものは，TLMG における「第 1 層（行為レベル）」「第 2 層（記号レベル）」「第 3 層（価値観・信念レベル）」にあたる。ヴァルシナーの「心理の内界に関する層モデル」を基礎とした TLMG の特徴として，人と環境は完全に分離すると考えられていない（包摂的分離）ことが挙げられており，「内と外を分けて分析することには限界がある（サトウ 2022，P.32）」ということ，そして，「分かれてはいるが重なりがある関係を包摂的分離として考えるべきであり，包摂的分離ということを考えるためには境界域（Boundary）概念が必要である（サトウ 2022，P. 32）」と考えられている。境界域とは，ハッキリと別れた線のように境界を捉えるのではなく，それぞれの層の間を繋ぐ「膜」のように境界を捉えるものである。サトウ（2009b）は「層と層（レベルとレベル）の間にはある種の膜が想定されており，その

図 6　内化／外化の層モデル（Valsiner 2007=2013, p. 427）



膜を透過することで，個々の行動がオーガナイズされた行為となり，個人の信念・価値観になっていくことを示している（p. 100）」と論じている。また，「内化は，外的に存在する記号的素材を分析し，内的な心理的領域において新奇なかたちで統合するプロセス（Valsiner 2007=2013, p. 420）」であり，「外化は，ある人の心理–内的に存在する（主観的な）個人的–文化的素材を内側から外側へと置換しながら分析し，これらの素材の新しい統合形態として外的な環境を変更するプロセス（Valsiner 2007=2013, p. 420）」である。

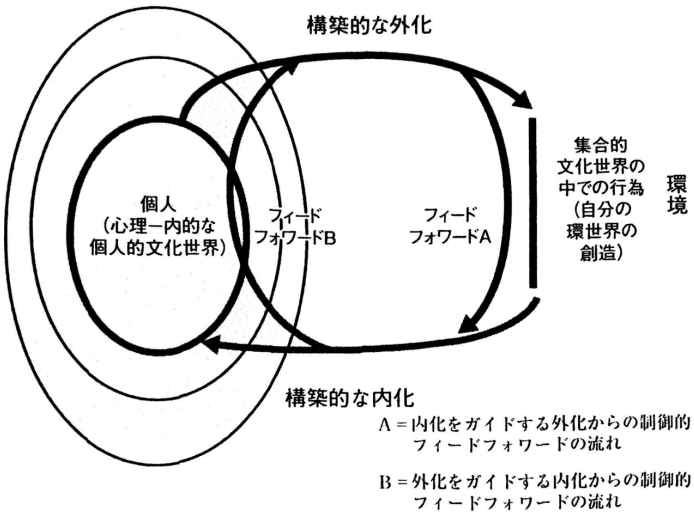
（2）ヴァルシナーの「相互依存的な関係プロセスとしての内化と外化」

ヴァルシナーは図 7 のように個人と環境との関係を表している。「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」（図 7；Valsiner 2007=2013, p. 421）は，「個人と環境の包摂的分離に焦点をあてたモデル図（宮下 2023, p. 56）」である。個人の内部に焦点をあてた内化と外化のプロセスは，個人と環境の能動的な関係を経て絶えず変化している。図 7 で描かれているフィードフォワードのループは，発話をしようとしている話し手の最初の聞き手は話し手自身であるという必然的な事実をもたらし，話し手は話しながら即時的なフィードバックを得ている。それと同様に，他者の話を聞くという行為は，話を聞く人自身の次のコミュニケーション行為の計画に送り込まれる（Valsiner 2007=2013）。

では，「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」（Valsiner 2007=2013, p. 421）で示されている「個人」と「環境」とは一体どのような関係を有しているのだろうか。それは「個人的文化（personal culture）」と「集合的文化（collective culture）」と呼ばれるものの集合体であると考えられる。

森（2009）は，「個人的文化」とは，個人の中間発生（記号レベル）の解釈構造であり，文化化

図 7　相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化（Valsiner 2007=2013, p. 421）



（culturing）は「微発生」（行為レベル）の言動を媒介とした他者との解釈構造との共振によって達成されるとする。そして，「集合的文化」とは，個人間の言動の接続（コミュニケーション）の特定の傾向，コミュニケーションの連鎖の中で特定される言動の意味の産出システムであると論じている。「集合的文化」は「複数の個人が相互行為するなかで生みだされ続けている動態的なものであり，個人的文化には集合的文化が浸透している（香川 2009，p. 159）」。また，香川（2009）は，発達とは外界から閉じた個人内で起こる変化でもなければ，外的環境からの一方向的な影響のもとで個人に起きる因果論的な変化でもないことを指摘し，個人的文化は集合的文化がなくしては成り立たず，また集合的文化も個人的文化なくしては成り立たないものであり，両文化の関係性から生じる文化的発達が発達そのものであると主張している。このようなことから考えれば，「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」は，個人的文化と集合的文化が絶えず相互に浸透し合う関係性を持っていることを表していると言える。

図 7 においてヴァルシナーは，「環境」のことを「集合的文化世界の中での行為（自分の環世界の創造）」と表現している。ここでの「環世界」とは，生物学者ユクスキュル（Uexküll, J. v.）の Umwelt（独）に由来する。ユクスキュルは「環境」と Umwelt すなわち「環世界」は対立するものであるとしており，「環境」はある主体のまわりに単に存在しているものであり客観的な「環境」であるが，Umwelt すなわち「環世界」はその主体が意味を与えて構築した世界であるとされる（日高 2005）。言い換えれば，自然科学的な認識で「環境」とは「周りを取り囲むもの」であり客観的に存在するものであるとされているが，ユクスキュルは周りの環境の中から自分にとって意味あるものを認識し，その意味あるものの組み合わせによって自分たちの世界を構築している（日高 2007）としている。

ユクスキュルの「環世界」については，彼自身が扱った「マダニの環世界」が例として有名である。マダニを取り囲む環境の中で，マダニにとって重要な意味を持つものは「哺乳類の体から発する匂い」と「その体温」と「皮膚の接触刺激」という三つである（日高 2007）。ここで私たちは「哺乳類」というカテゴリーを用いているが、マダニがそうしたカテゴリーを必要としているわけでもないし理解しているわけでも無い

ということには注意を要する。つまり，マダニにとっては世界がどのようなカテゴリーから成るのかといったことやその豊かさよりも、自身の行為の目的（血を吸うこと）にとっての確実さのほうが重要なものであり，マダニを取り囲む他の生物にとっての豊かな世界はマダニの環世界に変わるのである。Uexküll（1970=2005）は「単純な動物には単純な環世界が，複雑な動物にはそれに見合った豊かな構造の環世界が対応している（p. 20）」と指摘している。また，実行できる行為が多い動物ほど環世界で多数の対象物を識別することができる（Uexküll 1970=2005）と考えられている。

例えば，ヤドカリの環世界では「感覚器官から生じた知覚像（Merkbild）がその結果あらわれる行動に応じた作用像（Wirkbild）によって補われ変化する（Uexküll 1970/2005, p. 90）」。Uexküll（1970=2005）によれば，ヤドカリに必要な知覚像は円筒形ないし円錐形の輪郭をもつ一定の大きさの対象物であり，それが何であってもヤドカリにとっては意味を持つという。ここでは，ヤドカリにとって円筒形をした対象物としてのイソギンチャクの意味が変わることを論じている。

ユクスキュルは，人間は動物と比べてより複雑に「自分の環世界の対象物でおこなうあらゆる行為について作用像を築き上げており，それを感覚器官から生じる知覚像と不可避的にしっかり結びつけるので，その対象物はその意味をわれわれに知らせる新たな特性を獲得する（p. 92）」と論じている。そして，このような対象物にその意味を知らせる新たな特性を獲得することを「行為のトーン」，すなわち「作用トーン」と呼んでいる。例えば，「椅子」（知覚像，対象物）は人が休憩する（作用像，行為）場合には「休息のトーン」（行為に対する意味づけ）となるが，武器として使用する（作用像，行為）場合には「殴打のトーン」（行為に対する意味づけ）となり，別の「作用トーン」が生まれる（Uexküll 1970=2005）。

先に述べたヤドカリについて言えば，ヤドカリの家である貝殻についていたイソギンチャクを取り外した場合は，これまでイカからの攻撃を防いでいたイソギンチャクがなくなったことで，ヤドカリから見たイソギンチャクという対象物は「保護のトーン」となる。それはヤドカリがイソギンチャクを貝殻にくっつけようとする行為にあらわれる。しかし，このヤドカリが家であった貝殻を奪われると，貝殻の代わりとしてイソギンチャクに潜り込もうとする。つまり，ヤドカリにとってイソギンチャクという対象物は「居住のトーン」となるのである。このように，ヤドカリにとって「必要な円筒形または円錐形の輪郭をもつ一定の大きさ」の対象物（知覚像）であったイソギンチャクは，「ヤドカリの家である貝殻にイソギンチャクをくっつけようとする」または「家である貝殻を失ったヤドカリがイソギンチャクの中に潜り込もうとする」という行為（作用像）によって，ヤドカリの環世界が補われ変化することが示されている。

動物は行為の数が増すにしたがって，その動物の環世界に存在する対象物の数も増える。そして，体験を積み重ねることのできる動物は生きていく過程でその環世界に存在する対象物が増えていく。なぜならそれは，新しい体験によって新たな印象に対する新たな態度を引き起こすからである。そして，その際に新しい作用トーンを持った新しい知覚像が作られる（Uexküll 1970=2005）。では，人間ではどうなのだろうか。人は体験を積み重ねることができる動物であり，新しい体験によって新たな印象に対する新たな態度を引き起こすことができる。Uexküll（1970=2005）が「実行できる行為が多い動物ほど環世界で多数の対象物を識別することができるといってよい（p. 94）」と述べているように，人は体験を積み重ねることでその人個人の環世界における多数の対象物を識別することができるようになる。

人間の環世界について，Jensen（2020）は「人

間は特定の環境の中で成長する過程で，同様の個人的環世界（personal umwelt）を発達させる（p.137）」と指摘している。「個人的環世界（personal umwelt）」とは，人間がある環境の中で生活しているとしてもその認識は一部だけにすぎず，個人の選択によって個人が概念化した世界であるとされる。人が何かを経験するときにその人は自分の「個人的環世界（personal umwelt）」に関連した意味を創造し，その意味の創造に含まれる価値観や態度に関連して行動する。このことはある経験が個人の中で重要ではないものとして判断されることも含まれている（Jensen 2020）。

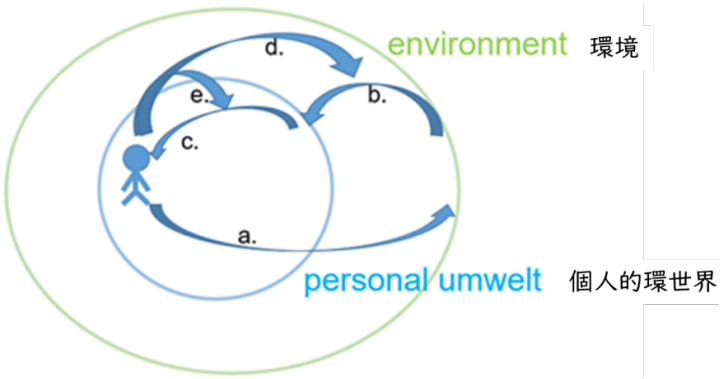
図 8 は Jensen（2020）による「自己を発達させるダイナミクスの分析図」であり，Jensen（2020）によって以下のように説明されている。個人的環世界は，人生を通じて確立され，発達する。この個人的環世界の発達過程において，環境は個人的環世界に影響を与える（矢印 b）。環境における条件，可能性，課題は個人的環世界の様々な側面の構築を強化したり妨げたりする。個人と環境は相互的に影響を与えるため，個人もまた環境に影響を与える。その後，人々はリフレクション（内省）することが上手くなり，次第に個人的環世界が自分にどのような影響を与えるかを，より高度に決定できるようになる。最後に，教育を受けるなど特定の現象を学ぶことによって個人的環世界を豊かにし，拡大することを決定づけることができる（矢印 d）。図 8 の矢印 d と矢印 e は個人の発達に関する一定の主体性を持つようになることを示している（Jensen 2020, pp.137–138）。このような「個人的環世界」について，Jensen（2020）は「個人の歴史を通して構築され，発達させられ，なぜそのようになったかを理解するためには特定の人物の伝記的研究が必要である（p 138.）」と述べている。つまり，個人がどのような個人的環世界を有しているのかを理解するためには，その個人が経験してきた歴史を知る必要があり，「自己，個人的環世界，環境」との相互浸透的な関係の中でどのように自己を発達させているのかを知る必要があると考えられる。

本論文で述べる環世界とは，周りの自然科学的な認識での環境および集合的文化の中から個人が意味あるものを認識し，その意味あるものの組み合わせによって構成された世界である。そして，人間の「個人的環世界」は，その個人が生きてきたライフ（生命・生活・人生）の中で構築され，発達してきた世界である。

（3）ズィットゥンのイマジネーションループモデル

イマジネーションとは「過去の経験をもとに新たな考え方やイメージをつくるプロセスを意味し，現実と近接する世界の想像（木戸，2023b，

図 8　自己を発達させるダイナミクスの分析図（Jensen 2020，筆者訳）



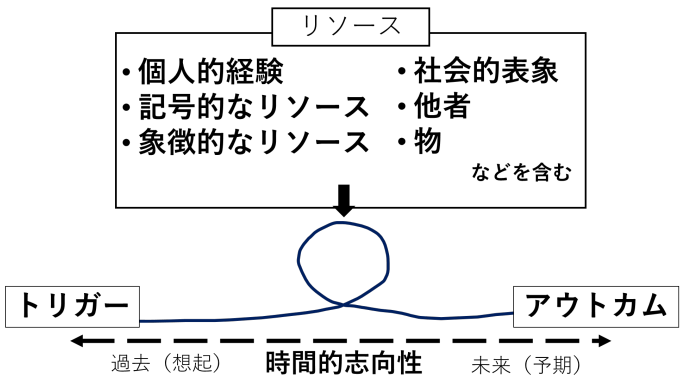
p. 63)」を扱うものである。イマジネーションは日本語に訳せば「想像」という表現となるが，イマジネーションを示す「想像」という言葉には「構想」の意味が含まれている（木戸，2023b）。イマジネーションは図 9 のように「トリガー」，「リソース」，「アウトカム」を伴う「時間的な連続のループ」であるとして概念化されている（Zittoun & Gillespie 2016，筆者訳）。「トリガー」は，経験の近位圏からの切り離しを引き起こすものであると定義されており，「イマジネーションする」ということは，「今–ここ」にある近位の経験から人を切り離すことである。「リソース」は，「個人的経験・記号的なリソース・象徴的なリソース・社会的表象・他者・物など」を指し，個人の経験だけでなく社会的に共有されたイメージもリソースとなる。個人が持っているリソースは多ければ多いほど想像を広げていくことができると考えられており，それらのリソースを使って人々は想像を広げていく。そして，想像して現実世界に戻ってくるときに新しい何かが得られる。この新しい何かとは，想像してみて楽しかったというような感情や新しいアイディアが浮かんでくるといったこと，どのような計画を立てようかといった計画などが含まれ（Zittoun, 2020），このような新しい何かが得られるという結果が「アウトカム」である。

また，図 9 における「時間的志向性」とは，時間的な方向性を示すものであり，未来のことを予期したり，過去のことを想起したりすることを表す。ここで想起とは remembering であり，過去のことを考えるということである。また，予期とは anticipating であり，これからのこと（実現可能性が高いものも低いものも含む）を考えることである（Zittoun, 2020）。木戸（2023b）は「意識を探索するイマジネーションは遠い過去の経験を探ったり，未来の体験を探ったりすることができる（p. 69）」と論じている。このようなことから，図 9 における点線で示した矢印は「時間的志向性」を表し，右向きの矢印は「未来」を予期すること，左向きの矢印は「過去」を想起することを表している。人のイマジネーションは，「トリガー」が発生することによって始まり，さまざまな「リソース」の影響を受けて過去や未来の経験を探ったりすることで「アウトカム」へと至る（上川・宮下・安田・サトウ 2024）。

イマジネーションはアイデンティティが揺らいだり，ラプチャーに遭遇してそれまでの経験と未来の経験がつながらなくなったりするといったこと（TEA における分岐点（BFP））が生じたときに，これまでの経験や社会的なリソースの使用を促し，新たな可能性を示す役割を持つ（木戸 2023b）。BFP とは，「文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイント

図 9　イマジネーションループモデル

（Zittoun & Gillespie（2015），Zittoun（2020），宮下・上川・サトウ（2022b），上川・宮下・安田・サトウ（2024）をもとに作成）



（上川 2023，p. 7）」であるが，BFP においてイマジネーションが果たす役割を考慮することで，個人の選択プロセスをより多角的に理解できるようになる。具体的にいえば，個人が BFP に立ったとき，その時点で思考する過去や未来の出来事を時間の制約なしに想像していることを明示的に記述することが可能になる（上川・宮下・サトウ 投稿中）。

3 TLMG とイマジネーション理論を統合した分析手法モデルのまとめ

以上をもとに，図 4 について振り返ってみたい。このモデル（図 4）は，記号を媒介とした文化によって「個人的環世界」がどのようにして創り上げられているのかを TLMG によって分析し，イマジネーションを通じて「個人的環世界」と「環世界」が個人の思考によってどのように解釈され繋がっているのかを分析することができるモデル図だということになる。以下では本論文で提示したナノエスノグラフィとその分析手法モデルに対する示唆について解説する。

まず，筆者がナノエスノグラフィにおいて本論文で重要視している「エスノメソドロジー的視点」とは，「他者とともにつくりあげている社会を志向し，人びとが実際に解きうる問題を解くことに寄り添う研究法」であるとともに，「自明な日常世界の解剖」という視点である。Francis & Hester（2004=2014）は，エスノメソドロジー研究は一目でそれとわかる事柄について，自己省察の態度をとることから始まり，なじみのある光景や活動を単に自明視するのではなく，そうした光景や活動がどのように産出されるのかという問いを立てると論じている。また，活動を産出として記述するということは，「人びとがその活動を，当の活動が進行していく過程のなかで生み出しているという点を強調した言い方（Francis & Hester 2004=2014，p. 343）」であるとされている。本論文においては，人々の日常生活の中で行われている馴染のある自明的な活動に対し，その活動がどのようなプロセスを経て生み出されていくのか」という視点を持つことも重要であると考える。

次に，イマジネーションという人々の想像（構想力）は，これまで個人が生きてきて創り上げられた個人的環世界の中で絶えず繰り返し行われており，イマジネーションはその場における環世界と個人を一体化させるものと考えられる。森岡（2008）は，「想起は反復を通じて過去が現在に影響を与える。一方では今現在に生きている場面や出来事があり，他方には，かつてたとえば，子どものころの経験した場面や出来事がある。これら二つの出来事は時間経過によって隔てられている。かつての出来事（現在）が，時間経過を隔てて，今ここというアクチュアルな現在にいかに作用するのか，影響を与えるのか。これはまた想起された記憶がどのように意味づけられるかという問題である（p. 116）」と指摘している。

最後に，本論文で提案するモデル（図 4）は，異なる文化を理解するという点において，記号論的文化心理学の観点から，個人それぞれの行為が異なっていたとしても，その行為に対する価値が同じである場合を分析する際に特に有効であると考える。つまり，価値が同じでも行為が異なる場合は記号の解釈が異なっているということを示すことができ，その記号の解釈が異なる背景には個人的環世界と行為に至る過程で想像／思考された過去・現在・未来がどのように関わっているのかを示すことができる。

VI　おわりに――今後の課題

本論文では，「異なる文化を理解する」ツールとして TEA を用いることを念頭に，TEA とエスノメソドロジー的視点を融合させた「ナノエ

スノグラフィ」を提案した。「ナノエスノグラフィ」は，ある状況下における「心理内的プロセス」に伴う「個人に属する文化」（記号による調整）を描くことを目標とする研究方法である。この方法論は，TEA が依拠する記号論的文化心理学の理論的基盤に基づきながら，エスノメソドロジー的視点を参考とすることで，日常生活における文化的実践をより微細に捉えることを可能にすると考える。

本論文を終える前に，本論文の限界と今後の課題について述べておきたい。本論文では「ナノエスノグラフィ」を人々の関係構築のプロセスを研究するものとしてどのように活かすことができるのかについて言及するところまで至っていない。今後の課題としては，まず一つ目に「ナノエスノグラフィ」が分析のフィールドとする「場」について，より精密に整理する必要がある。TEA における行為レベルは「選択や行動や認識など」というように「認識」が含まれているが，「行為」には「情緒的（affective）なもの」が含まれている。このような情緒的なものが伴う「行為」に着目するという文化心理学の特徴に基づくならば，どのような場面における自明的な行為の「心理内的プロセス」をどのようにして解剖していくのか，実際の事例研究を重ねながら，ヴァルシナーのナノサイコロジーと記号論的文化心理学のアプローチとの整合性も検討していく必要がある。

また，「異なる文化を理解する」という行為そのものについても注意が必要である。研究者と研究協力者との間で行われるトランスビューは，「異なる文化を理解する」という実践において重要な意味を持つと考えられる。トランスビューとは，「経験の当事者／語り手と分析者／聞き手とが，いま・ここで，TEM 図を介して過去–現在–未来を行き来しながら視点（view）を融合（trans）させ，とらえられた径路の真正性を精査する行為（安田 2018）」である。安田（2018）は，トランスビューについて TEM 分析の真正性を高めることを前提に「分析者は分析の確かさを認識するとともに必要に応じて修正し，また当事者は，自らの経験への新たな気づきや意味づけを生じさせる（p. 227）」と論じている。このようなトランスビューの考え方から見れば，「異文化を理解するツール」として「ナノエスノグラフィ」を活用する中で，研究者と研究協力者が対話を通じて互いに意味を見出せているかどうかが「ナノエスノグラフィ」的飽和状態の一つの形となると考えられる。つまり，研究者と研究協力者の対話を通じて，互いの認識を修正し，新たな気づきや意味づけを生じさせていく過程そのものが，文化理解の実践となりうる可能性がある。ただし，森岡（2009）が「他者は私の理解をそのつど超えていく（p. 48）」と論じているように，「他者とは根本の意味ではけっして自己と同一にはならないもの，合一を許さぬものである（森岡 2009，p. 48）」ということに意識的になることも必要となるだろう。

本研究は，文化理解のための新たな方法論的提案を行ったものであり，今後の実証的研究を通じて，その有効性と実践的意義を検証していきたい。

VII　引用文献

相原次男（2019）序章 1 多文化共生社会の構築に向けて—課題と展望．権五定・鷲山恭彦（監修）多文化共生社会に生きる—グローバル時代の多様性・人権・教育．明石書店，14–17.

塙幸枝（2019）第 2 章 「ふさわしさ」をめぐるコミュニケーション—読めない空気．池田理知子・塙幸枝（編）グローバル社会における異文化コミュニケーション—身近な「異」から考える．三修社，25–32.

Francis, D. & Hester, S. (2004) Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction. 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小

宮友根（共訳）（2014）エスノメソドロジーへの招待—言語・社会・相互行為．ナカニシヤ出版．

古家聡（2017）文化本質主義と異文化コミュニケーション研究．武蔵野大学紀要 Global studies，創刊号，11–21．

Garbarino, M. S. (1977) Sociocultural Theory in Anthropology. 木山英明・大平裕司（1987）文化人類学の歴史．新泉社．

日高敏隆（2005）訳者あとがき．ユクスキュル・クリサート（著）日高敏隆・羽田節子（訳）生物から見た世界（Uexküll, J. v. (1970) Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH.）．岩波書房，159–166．

日高敏隆（2007）動物と人間の世界認識—イリュージョンなしに世界は見えない．筑摩書房．

石井敏（2013）第 10 章 異文化コミュニケーションの研究．石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人（著）はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて．有斐閣，235–257．

石井敏・久米昭元（2013）第 1 章 異文化コミュニケーションの基礎概念．石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人（著）はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて．有斐閣，11–36．

岩渕功一（2010）序章 多文化社会・日本における〈文化〉の問い．岩渕功一（編）多文化社会の〈文化〉を問う—共生／コミュニティ／メディア．青弓社，9–34．

Jensen, M. (2020) *Developing Psychology from the Diversity of Living Conditions: Comment in Dialogical Multiplication by Guimarães, D.*. Springer.

加賀美常美代（2019）異文化間葛藤と教育価値観—日本人教師と留学生の葛藤解決に向けた社会心理学的研究．明石書店．

香川秀太（2009）第 5 章 方法論に関する問いかけ 第 6 節 異種の時間が交差する発達—発達時間論の新展開へ向けて．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，157–175．

樫田美雄・岡田光弘（2019）4-3 エスノメソドロジー（ethnomethodology）．サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ，活用するために．新曜社，174–182．

上川多恵子（2023）第 2 章 TEA の基本概念一覧．上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）カタログ TEA—図で響きあう．新曜社，5–10．

上川多恵子・宮下太陽・安田裕子・サトウタツヤ（2024）共食を通じた結婚初期夫婦の関係構築過程—TEM のイマジネーションモデルを用いた一考察．TEA と質的探究，*2*（2），156–177．https://doi.org/10.60421/jatqi.2.2_156

上川多恵子・宮下太陽・サトウタツヤ（投稿中）複線径路等至性アプローチの時間概念における方法論的考察—イマジネーション理論を援用して TEM 図時間的文脈を TEM 図でどう描くのか．

木戸彩恵（2023a）第 1 部 理論 第 1 章 文化心理学の基本的射程．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，3–13．

木戸彩恵（2023b）第 1 部 理論 第 6 章 イマジネーション．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，63–75．

木下寛子（2019）第 3 部 方法論 第 1 章 記述のまとめ方 ①マイクロエスノグラフィ—私たちが生きる世界を訪ね直す方法．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，211–221．

串田秀也・好井裕明（2010）序 エスノメソドロジーへの招待．串田秀也・好井裕明（編）エスノメソドロジーを学ぶ人のために．世界思想社，1–14.

前川啓治（2018）超越的・超超越的「文化」の客体化．前川啓治・箭内匡（編）ワードマップ 21 世紀の文化人類学—世界の新しい捉え方．新曜社，15–29.

南博文（1996）自明的な世界の解剖—エスノメソドロジー．浜田寿美男（編）《別冊発達 20》発達の理論-明日への系譜—発達論構築の現場に立ち会ってみよう．ミネルヴァ書房，135–154.

南博文（1997）参加観察法とエスノメソドロジーの理論と技法．中澤潤・大野木裕明・南博文（編）心理学マニュアル—観察法．北大路書房，19–62.

箕浦康子（1999）第 1 部 フィールドワークの技法 第 1 章 フィールドワークと解釈的アプローチ．箕浦康子（編）フィールドワークの技法と実際—マイクロエスノグラフィ入門．ミネルヴァ書房，2–20.

宮下太陽（2023）質的研究法 TEA の新たな理論的展開とキャリア領域における実装可能性．立命館大学大学院人間科学研究科 博士論文.

宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ（2022a）TEA（複線径路等至性アプローチ）における記号概念の考察—パース，ヴィゴーツキー，ヴァルシナーを手がかりに．立命館人間科学研究，*44*，15–31.

宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ（2022b）TEM（複線径路等至性モデリング）のイマジネーションモデルに関する考察—記号圏とイマジネーション理論を踏まえて．立命館人間科学研究，*44*，49–63.

宮下太陽・安田裕子（2024）V-1 文化心理学と記号圏—ミクロとマクロのせめぎあいを捉える．谷口忠大（編）記号創発システム論—来るべき AI 共生社会の「意味」理解にむけて．新曜社，178–183.

森直久（2009）第 3 章 TEM 動乱期（2006-2007）第 3 節 第一期 TEM 完成，その後．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，75–91.

森岡正芳（2008）想起・反復・現実構成—野村論文へのコメント．心理学評論，*51*，114–119.

森岡正芳（2009）対話空間を作る—インタビュー実践としてのセラピー．質的心理学フォーラム，*1*，39–48．https://doi.org/10.24525/shitsuforum.1.0_39

サトウタツヤ（2006）発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線径路等至性モデル．立命館人間科学研究，*12*，65–75.

サトウタツヤ（2009a）第 4 章 概念の豊富化と等至点からの前向型研究 第 1 節 ZOF（目的の領域）による未来展望・記号の発生と「発生の三層モデル」．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，92–101.

サトウタツヤ（2009b）第 2 章 HSS の発祥と TEM との融合．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，33–54.

サトウタツヤ（2015a）複線径路等至性アプローチ（TEA）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ．新曜社，4–8.

サトウタツヤ（2015b）複線径路等至性アプローチ（TEA）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，4–8.

サトウタツヤ（2017）第 5 章 TEA は文化をどのようにあつかうか—必須通過点との関連で．安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する．誠信書房，208–219.

サトウタツヤ（2019a）第 1 部 理論 第 3 章 記号

という考え方—記号と文化心理学 その 1．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，27–39.

サトウタツヤ（2019b）第 2 部 各論 第 6 章 文化心理学×移行 ①お小遣いから見る文化／文化から見るお小遣い．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，179–190.

サトウタツヤ（2019c）本書の構想．サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ，活用するために．新曜社，2–8.

サトウタツヤ（2022）4 章 TLMG（発生の三層モデル）価値と行為を媒介する記号の働きに注目する．安田裕子・サトウタツヤ（編）TEA による対人援助プロセスと分岐の記述—保育，看護，臨床・障害分野の実践的研究．誠信書房，28–42.

サトウタツヤ（2023a）第 1 部 理論 第 3 章 記号という考え方—記号と文化心理学 その 1．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，27–39.

サトウタツヤ（2023b）第 1 部 理論 第 5 章 記号の取り違えとやっかいさ—文化のズレを包摂するための記号の価値—行為媒介説：記号と文化心理学 その 3．木戸彩恵・サトウタツヤ（編），〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，53–62.

サトウタツヤ（2023c）改訂版あとがき．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，317–319.

サトウタツヤ（2024）監訳者まえがき．ヤーン ヴァルシナー（著）サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽（監訳）（2024）文化心理学への招待—記号論的アプローチ（Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology.* ）．誠信書房，vii–x.

関根和代（2018）文化人類学における質的研究．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，277–278.

柴山真琴（2018a）エスノグラフィー．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，28.

柴山真琴（2018b）マイクロエスノグラフィ．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，294.

柴山真琴（2019）3-5 マイクロエスノグラフィ．サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編），ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ，活用するために．新曜社，129–135.

Spradley, J., P. (1980) *Participant Observation.* Thomson Learning. 田中美恵子・麻原きよみ（訳）（2010）参加観察法入門．医学書院.

竹沢泰子（2018）文化人類学．有斐閣.

田島信元（2000）文化心理学の起源と展開．心理学評論，*43*，1–7. https://doi.org/10.24602/sjpr.43.1_1

辻内琢也（2018）文化人類学．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，277–278.

上村佳世子（2018）文化心理学．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，277.

Uexküll, J. v. (1934; 1970) *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen.* 日高敏隆・羽田節子（訳）（2005）生物から見た世界．岩波書房.

Valsiner, J. (2001) *Comparative Study of Human Cultural Development.* Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

Valsiner, J. (2007) *Culture in Minds and Soci-*

eties: Foundations of Cultural Psychology. サトウタツヤ（監訳）（2013）新しい文化心理学の構築—〈心と社会〉の中の文化．新曜社．

Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology*. サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽（監訳）（2024）文化心理学への招待—記号論的アプローチ．誠信書房．

Valsiner, J. (2015) The place for synthesis: Vygotsky's analysis of affective generalization. *History of the Human Sciences. 28* (2), 93–102.

Valsiner, J. (2018) TOWARDS NANOPSYCHOLOGY: Why Small Data are better than Big Data?. 立命館大学大学院人間科学研究科開設記念イベント その 1 第 8 回総合心理学セミナー VALSINER 先生立命館大学客員教授就任記念 公開シンポジウム．

山本雅美（1999）第 9 章 コミュニケーションの文化心理学．深田博己（編）コミュニケーション心理学—心理学的コミュニケーション論への招待．北大路書房，143–157.

安田裕子（2015）径路の可視化—TEA による分析の流れ（その 2）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，47–51.

安田裕子（2017）序章 TEA（複線径路等至性アプローチ）とは何か 第 2 節 生みだされる分岐点—変容と維持をとらえる道具立て．安田裕子・サトウタツヤ（編）TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する．誠信書房，11–25.

安田裕子（2018）トランスビュー．能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）質的心理学辞典．新曜社，227.

安田裕子（2019）1-2 TEA（複線径路等至性アプローチ）．サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ，活用するために．新曜社，16–22.

安田裕子（2023）第 10 章 採録オンライン講習会 TEA 基礎編 TEM を理解する．上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）カタログ TEA—図で響きあう．新曜社，91–99.

Zittoun, T. (2020) 2019 年度 日本発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会 講演記録 ライフコースにおけるイマジネーション—社会文化的心理学の視点から（Imagination in the life course: A sociocultural psychology perspective）．発達研究，*34*，204–228.

Zittoun, T. & Gillespie, A. (2016) The loop of imagination. In *Imagination in Human and Cultural Development.* London: Routledge, 38-55.

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

https://ratik.org